



七款集大全春の日記
七款集愚樹園即註

青藍
道齋



七款集大金春の日記
七款集馬樹園即注

道舊 多藍

雲英文庫

水鳥文庫

俳諧七部集大全
春の日

藍亭青藍註

春日

世集の連歌にて春をよみたる句ありて故に春日と名づく蓋冬の日を對して許六云春の日ハ
重なり庵ありて真行の歌仙なり云

曙

枕草紙 春はあけぬるやうく志ろくたりしゆら山がはすしあけりて雲あちちる雲のふけく
たたりしるる云春ハ曙を賞す事あまき歌にもよる尾州執田後世宮宿と云

渡舟とハ宮宿より東名宿へ渡る舟を云

馬

馬のいく足はなく續きぬをよみ段句の餘情をたて東海道筋のまをよみあけり
又せり

月

さしつづ月影小俄に館よりとくし館の字を書きて昇殿の家ふりてをよみせり
景色の附註なり

月影

月影を敵の館を軍兵のこやりしるる事あり

山

山崎奇談の頃ふりて大田左衛門大夫持資の上校の臣とあり時定政下總の廳南
軍を出す時山崎の海邊を通る山より奴らに射りけり人又潮満と云えり
このときあやふりし所なり夜半の事なり時持資いささ月見し人
馬を馳出すやえり帰り車も潮を干たりと不定政いささ月見し人
とひりぬを「近くなり近くなり」浪干多たき音なり潮のミちひをばあきと云
歌あり志ろく云千鳥の夢と云くやえりぬは水をとると是なり下巻世の傳より

とつてよ三月三日をふくむたれがくねを嬉ひたつた程多ぶぬしし附心酔後に水をさすむ
餘情をさしり

をりつる 白賣の酒子魚いしたるさぬを附し

ゆきあき 大奉祭よりまるとハ虫をさすらる者噂とてし 目次記事 大奉祭牛祭

九月十五日山城国葛野郡大奉の唐隆寺ハ常磐村の南の内村の西北にあり桂の
宮の院内ハ伽藍神あり大僻の神社と号す祭神奉祭の始白王帝なりト云
祭式ハ平著しける俳諧草木に毒しく書たれハ往てし 竹立白きトハ牛二乗て
祭式文を讀誦す行者の竹立ちとてし

サカる 大奉祭の節菊ある垣よりよみてあきし其祭もろわとてし今ハ

其子ゆきこ居る事やと思ひやりし附し 表所 大鏡 何丸云よきをかくい芳ひとてせとてし 夫婦ハ髪剃て

火宅をのがれんとしり 賤いなり車ゆくまらとて未せをありし事 法華經三車
一乗の心を哥に世の中を牛の車の中よりてんあひの歌をいりて出ま 又宗持
の附に前白誰うさてあひの歌を出つんとしに賤いなり車やとてし

鯉魚 前白の車を牛車とて近江国大津の炭を附し 鯉 北越の産物此国ハ

ゆき物ゆある作のあらしとてし

何やら 鯉魚とて大津の炭をふる土の者の安あり故に吾国の立音とて軍立

とまりた也 旅衣 あまをうた故やうしる本質宿のさぬなり 板宿のうち吾国の音

声きこえれば何やらきくと耳をたんとてし

廿秋 大鏡 一書云五日の原ハ嵯峨のあひも其夜五日の會式とてある処とてし

云あまをうたふ改やうしる五日の會式に集りたる近国の人といふ

里人 五日の會式にあつたりたる里人の聲をふりてし附し

月 秋の雨とてし 秋水漲りまるとて趣向とし 雨中月をあらしむ

る他のことし

こぼる こぼるる木の根より花の點とてし 高水 のさぬをせし

うたむ 花の點とてし 前白 を湯治場の遊ひと附し

のん 東男 の京サ郎式筑前の博多帯子薩本綿をとりてし 袷 ハ錦衣の形

よ御く常小伊勢の唐よりしとて流言なき頃ありしころ一附意六湯浴り
あつる女子の風俗をあらわす

内侍の 筑紫の枝伊勢の帯とあめくる風俗を官女と轉して天子の御側お待まて
諸事執行ふ女官を内侍とよみたり

内侍の 鸛眉 牝眉山 山眉 霞眉 煙眉 大形眉 山岸立眉 唐眉 静眉
枯眉 摩眉 茫々眉 云々

もの思ふ 許六云眉うきくさるるしつとてあさまあそ一軍の中八吉野の皇居
たゞとミチりしあそ

名をもち **大鏡** 一書つ云大関小田原陳の時相が山中の村老搦粟を執せし事あり云
軍の道途を祝しきさあたり 和漢書 搦粟倭俗搦の訓を勝のさふくして諸勝負
の利あるを悦びて用之云々 初春祝物に用ふるも勝の訓を祝して

大年ハ 念佛ハ佛子とせまうせきを大年の夜たれハ惠美復棚も向ひて中とソコたり
前年の搦粟を初春の祝物として大年のさるを趣向とし ぢとふり云佛を
あいらひく 續後表 きさくさくや大黒棚のあひ 和名記 附白大黒棚のともし消ゆる云

大黒棚 妻棚家毎にあしりのえ

このち 大年の世話しきやすもいんんさうお世事お頓着せぬや我転よき隣り

行の 其場の附りてうれくる意味なり

ちやこ 都さ日とちやき夢の粉とつみて 田家お近き住居のちあをんせり

ひとね **大鏡** 何丸云攝津国田中金龍寺之十観阿闍梨寺役のいとあし馬を
追ひて淀川の助へ出て往來の旅客を助けり或ハ酒をのませ或ハ寺にハウ入つて一宿を

させりしとて艱難をすくひりしとえき 親書扶桑隱逸傳おにえきり云
○十観の傳ハ曠野集釋教の部十観馬とかせりし 年の暮とく余に委しく

註すし 前白の夢の粉は寺の馳走と云

こて魂 **大鏡** 何丸云馬うり寺とつて附るは天玉と云ふるし 太子黒の
伊おして二月の魂まうちんん云のまさききの月ハ月次の月混ぶるんさて此面の

月前お月次出るあ急に名探の引上花の座一月をさしものささを **大鏡** 何丸云
飛巻の月ニツトより短白の月なれハ言ふとて廿九日の月いとすのなるをもて
神いとつちをりり云又七部早見此月をくへて二花四月の巻とすと云ふ

誤と云ふ

師たる 陽をの如くも之強き老夫婦とりあふりけの文を如くのと
歌云天雲のよきも人のちりゆくすかあ因おののし天雲のの文を
同し魂冬ハ二月五月七月八月九月十月以上六度あり報恩經云之
白意ハ老夫婦の先くつる子の魂をわくる

妻雨神子 **大鏡** 何丸玄源平盛表記 白清見原天皇大伴王子にあそみあひて

吉野の奥上土のそら此国栖の羽粟の信料にうくひと子思を供御不備天皇
御制衣に三よ一野のくすの物のなうせへ腹赤のつぎたね備へん云此侍た

田を 花もゆよ一野工生れたねこたこのるやんもなま歌をい

かのめ 前白の田を拵くとゆふ子有徳なくす郷士のさぬさうさて花の里

生れつるなまもせん祖誰る力の節を中の子がつ

連也 **連** 花詞なり **百辞考** さうまこは近は国志賀郡ある彼たまてふ地あてその

大名たう故の真田の所こ冠せし云三井寺ハ江州大津の側にも又園城ますと拵す

白意ハらりのの歩をつぎ中のを三井の末寺の跡と

こびく 山に降つ雪のまきを附て近江路のぬをせ

十六夜日記 十月廿九日のふ云云をいでく濱路をゆくとゆく明と

つをいほそき月出 **浦路** 心ほきを海をい

此日記を併をふく前白を相根山の雪きと

根山にうくるあた廿九日の月の出ふをあひて十六夜日記と書ふ本書を

君のつ 君が春の野ふいでく若菜つむ衣のた雪ふつと

哇 **雑語譯解** 本ハ忘る

ハハ事ハ時ケカラヌヒトイエライのちり云云白息ハ哇のこきの上も

額 額こまの春の雨りとして我家のあ

是るるも皆哀れうきれとその人とりあふくをさうりくはるは是ホの
話より多良家の玉冬とらあゆを趣向するはし

雪の集 山家集 たりくはるのうらるは月をたてたすさうりたるは

西行

瓦の心 齊宮の心詞 佛をたうことりし経を法紙とりしきをなふくもと

いふより 徒然草 ことりくはるのうらるは月をたてたすさうりたるは

月の夜よいぬ夜とそらまへと上面ととりくはる

目足着 平家八島唐の事人の知れ故に註するを

本ぬ殿と唐 本ぬ殿の字も本ぬ殿と向うをこ人も唐の都とそらまへと

二階へたし登りて見ぬ殿ととりくはるは月をたてたすさうりたるは

馬の牛 いろはにわれらうまを旅人のあはれとそらまへと野路のしる雨

本田道隆此歌の心をやみ畢竟短歌巧をたまふことし風諫とそらまへ

雪の集 着せ中へき夜具の設りたれぬ蚊やをきせて雨振夜をいたる

とそらまへ

雪の集 雪の集の子 よきふ積りたる雪はやく風あちまのりれぬ魚うた

よひと 故に雪のたをりたるをくはる雪の集の子のやうなることし曲

ともいふもたしと雪のうら尾をよきふ積りたる公羽の白意も枯尾をよきふ積りたる

さのやく風よちるさうりたるを我にさうりたる

七部集黒樹郎註

猿蓑

續々々々々

あゝあゝ

猿蓑目録

續さるもの目
あはれもの目

い

一戸や衣やうのこまおうく
伊勢酒やち木川付むらさきのまろ

六丁ノ
ナ丁ノ

は

ころおれり 似わ北斗の星ちのあ
とらおれり 何とあふるぞ 船中
ああり うつし世久しき 産うい
増とまる 木舞の竹 おちの 香き
増あり ちきりさるの 子ゆい

三丁ノ
ニ丁ノ
ハ丁ノ
六丁ノ
六丁ノ
ハ丁ノ

と

遊心のおもひのつらむあけ
年切の老木も 柳の若葉も

六丁ノ
九丁ノ

昔^ああ^らの^の日^こく^くう^うの^の芙蓉^{ふじゆ}可^かれ^れる^る

唐詩選卷之七

七言絶句

西宮秋怨

芙蓉^{ふじゆ}不^な及^あ美^み人^に粧^ま水^{すゐ}殿^{てん}風^{かぜ}味^{あじ}珠^{たま}翠^{すゐ}翠^{すゐ}香^か

来^来云^云

ち ちやのめやほろ 人 ニテメ

そ 女をもゆらぬ馬骨の泣き声 ナニメ

起 カ 起きし人と途なり ナニメ

木もゆてや眠るまじり ナニメ

着きやね ナニメ

か ちきり ナニメ

た 永 ナニメ

流 ハニメ

ろ 雞 ニテメ

つ 月 ナニメ

月 ナニメ

ゆ 合 ナニメ

な ち ナニメ

苗 ナニメ

う ナニメ

梅 ナニメ

の 野を横にさすきこむけしむきす 三十一

く くらての年のまうけわ白梅のまの 三十二

や やうめて又やさあし何年ものま 三十三

八重にんもさるもうし 三十四

病屋のあさもまらて格好 三十五

まのぢく梅のまの 三十六

ふ 舟人ぬらして 三十七

文月 三十八

こころ 三十九

ふや 四十

こころ 四十一

で 四十二

あ 四十三

あ 四十四

す 四十五

田

き

けし姫のちまきうもあしつゝねを 十丁ノ
君りくゆしましる年一しをねる 五丁ノ

金租ハあまこさうりりり 九丁ノ
木のりり 狸出らふねんけり 十丁ノ

ゆ

さちるやねんをのまの川あし 三丁ノ

め

妙福のまねあてあつさくを林 九丁ノ

み

三日月や美魚のあまをさしり 五丁ノ

し

あもまおまひいひるあつうの二丁ノ
あもまおま木つむ屋の宮あつう二丁ノ
新田の禪般經よりしんあつ二丁ノ
泥橋をたまあてあつう十あつ二丁ノ

ひ

白紙やあつうもあげあつうの也 九丁ノ
あつうあつう清階よりあつうのあつうし 十丁ノ
あつうあつうあつうあつうあつうあつう 一丁ノ

あ

も

あまあつうのあつうあつうのあつう 二丁ノ

せ

あまあつうの外あつうあつうあつう 三丁ノ
あつうのあつうあつうあつうあつう 三丁ノ
あつうのあつうあつうあつうあつう 九丁ノ

す

あつうあつうあつうあつうあつう 二丁ノ

猿蓑

はるみちのまはるののり のり 干那

近江の湖水たぎるをたぎるせいの

廣河 のり みるも 流たる 更那

沼たゆと流るをいふよ — 善治の流るたぎるいふよ

おん のり あら のり 尚白

あつとと のり のり

なつ のり わた のり なが のり の のり なる のり 良

のり のり のり のり のり のり

あつちのや馬本つむるをの意あり 凡此

馬本の替本に又替本すしめしむるは御り

村上天白と

つかるる名は

ついで井田の里わゆる水 七律 二初

大坂の堺とのるふんが井田

乃幸に山崎井田の里よりあると

うちよりあり 君をあらへ

新田又禪院 膳所 昌房

新田に去るれば禪院と云ふがちと替はつて昌房と云ふて

くらまのり初物北斗の早ものある百歳

樂天

山頂 霜四旦北斗近

くらまのり何れは舟の中其角

此位人の渡舟を下りてまの云々

禪者の書のみ茶や神を月凡此

禪者ハ十月法會の事

百かぶりの長あの中の花よ十月 春蘭

十月のあめはしら

こかしや顔腫痛む人の顔 芭蕉

砂よけを築き此の冬あるは
石 凡此

たじろみそ

榊カサのうさちありむる枯ぬる
伊賀 土草

浴梯をちこえて通す千おる
膳所 福道

よき秋九月五日を以て浴梯の十巻はあつくと
多きあること

ちやのちめわけのうさちありむる女越人

其母をいへる厩居士の娘は此をわたりて父ををるむる(土草)
父合するて入城す 母母ついでて城をわたりてあるまき

猿

美の買田の買田をわけて
龍炊ツウのちこちちちちちちちちちちち其角

霜月朝旦

猿セまわりの外は物なり
伊賀 良品

朝旦冬至曆赤文の赤柏ありまき
古の柏の葉入

かしこ
つを煮かす

信濃路をまき

さちちちちちちちちちちちちちちちち
芭蕉

信州新井山の神社ミナカケ
九月十七日の参り、徳を記してある、其の
みぎの橋をこえ、その時、
みぎの橋をこえ、その時、

くわてり年のまらけお伊勢くまの 「まらけ」

白雲のくわてり年（白雲のくわてり年）

ちやいかにて又たささかぬ早秋のまらけ

ちやいかにて又たささかぬ

~~ちやいかにて又たささかぬ~~

野入のあまききりくわてり年、
The autumn is the best time

あまききりくわてり年、
The autumn is the best time

真列下向時
ナス、草、チ

真列の細道、
The autumn is the best time

古人のくわてり年、
古詩又ハ、

今ハ、
The autumn is the best time

流れてくわてり年、
The autumn is the best time

せいのくわてり年、
The autumn is the best time

春水、
The autumn is the best time

短歌、
The autumn is the best time

よわたらん其の母と、
The autumn is the best time

る葉

人々
たぐひら我を待らざりやたのこ
もよめらも我を待てる

あさむねも梅野舎島の柳の風山川
ウコン葉胡聖根の根ひをまきて畑二十五(昔)をふくあまのちんちんして
なりのう

文月やうももりのおとけの芭蕉

文月ふしくい月のくさくさ(おとし)
もと福徳を合は月のおこい

合殿の木々葉こもい(おとし)月

セク年工二名のくはひひれな柳のちのちかど
ふらそ合殿の名をともい(おとし)

新いのころの柳の風
白目天

柳の天
招る白を居眠もあまのうせしするまはせ
中鶴ハ子をといてあを待ねりある。柳のちのちかど

まよひの柳のちのちかど
俗にアベコン棒

二十一代(葉)のちり
お肉人のよささし(ま)をばあわら
柳さ(ま)まの柳のちのちかど

君のちのちかど
君のちのちかど(ま)をばあわら

天好く巨下をさして君とよめる歌あり
巨下又天好をさして君とよめる歌あり

あまのこ

病屋のあまのこ

秋のあまのこ

けしきあまのこ

あまのこ

三日月のあまのこ

あまのこ

西条のあまのこ

月夜のあまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

けりし餅を供して神を祀る 政事要略 四ノ物法 下ノ巻 一ホ

洋ヨウや

ぬれ母のちとらぬむら子むらこのちきりなるしおや子この
十月のしあひのちとらぬむら子むらこのちきりなるしおや子この

階ハシとまのハシ本舞のハシゆわ虫のハシ舞六 日田房

外の里のハシ舞とて舞入我ハシのちとらぬむら子むらこのちきりなるしおや子この
是を自我ハシとて

道ミチ心のハシたハシらハシるハシものハシつハシらハシむハシ 丁本

二月十五日花つるむら子むらこのちきりなるしおや子この
夜廻ハシ浮ハシ祭ハシのちとらぬむら子むらこのちきりなるしおや子この

てらちがハシのハシあハシらハシるハシあハシらハシるハシ

世の初ハシ舞ハシのちとらぬむら子むらこのちきりなるしおや子この
舞とて舞入我ハシのちとらぬむら子むらこのちきりなるしおや子この
のちとらぬむら子むらこのちきりなるしおや子この

箱

半ハシ舞ハシのちとらぬむら子むらこのちきりなるしおや子この

のちとらぬむら子むらこのちきりなるしおや子この

のちとらぬむら子むらこのちきりなるしおや子この

のちとらぬむら子むらこのちきりなるしおや子この

續猿表

猿 善なり 小川の松原が 活園

猿表一節に松原なるは 又を 猿の松原 類を 猿猿表の けらるるなり

八市 猿 なるもの 後 なるもの 全園

八市 猿 なるもの 後 なるもの 全園 猿 なるもの 後 なるもの 全園

う なるもの 其角

なるもの 其角 なるもの 其角

流^カきもひーげと雄のふゆいー去^カ下

雄のふゆいー引さるー一たつては羽根をいまはすものさのきふあーくさ

羽^カらよ 月^カのさおさすさ拵^カ下

（さういー目とくさ）とさあ

こまものきおゆき白^カ羽^カ長^カ紅

こまものきのをあーきを白羽を伸すはうけてさー

蛾^カおりーたさーきの子飼^カ河^カ瓢

何れいささの揺さあし揺をひさささ

船^カのさいーあすまーし流^カのさおさ

船のさいーあすまーし流^カのさおさ

た^カくーもすけさつあ妻のさ正^カ秀

引さるー播下さるーあつあ妻のさ正^カ秀

若^カあおあさーけー隊^カのさけあ助

若^カあおあさーけー隊^カのさけあ助

苗^カねあさ^カ種^カをよれさるあけあ

苗のねあさ種^カをよれさるあけあ

春耕

ぬ福のふゆあてあしきく麻木良

ぬ福とは進福のうき語日本ぬ福と申す又いう六
ぬ福とは進福のうき語日本ぬ福と申す又いう六
ぬ福とは進福のうき語日本ぬ福と申す又いう六

苗れやほは絶あきりの青月あけ節

苗れとは苗代の玉穂晚稲又田のホ
あきりのれこ
あきりのれこ
あきりのれこ

千川の田をえんすなり誰は人一路

千川とは千代川のこと方言は誰は人のあきり
あきりあきりあきりあきりあきりあきり
あきりあきりあきりあきりあきりあきり

白柳おさけりも春の如く
柳隣

春の柳の月候しけふのゆくも春の如く

金柑あまのこも春の如く
我

金柑の木は三月に花をもち四月に実をまわす

年切の老木も柳の如く
千川

今年一年多くたれは木のこゝろしちるを年切と云
老木よりれは皆老のこゝろ

五日の雨の如く

あけぬるも春の如く
芭蕉

五日の世陶陶の如く春の如く
牡丹の花の如く春の如く

女も春の如く
湯子

女の如く春の如く

なまの如く
馬寛

なまの如く春の如く

けし姫の如く
史邦

けし姫の如く春の如く

起^オききー 今^イ迄^キけり 暮^ク夜^ヤの^ノ花^ハ車^{クルマ}痛^{イタ}

起^キききー
細^コ起^キききー人^{ヒト}述^ツーハ細^コを^カ刺^スききーサセ^セ包^カち^カふ^カサ^サ暮^ク夜^ヤの^ノ花^ハ車^{クルマ}痛^{イタ}

本^キの^ノ下^カり 狸^ヌ出^デま^マし^シ 穂^ホう^ウけ^ケら 四^シ夏^ゲ山^{サン}

穂^ホう^ウけ^ケらと^ト曲^マ衣^イた^タぬ^ヌこ^コ入^イる^ル今^イ年^{ネン}も^モた^タと^トく^クて^テた^タら^ラし
神^{カミ}の^ノ籠^{カゴ}に^ニ又^{マタ}狐^{キツネ}狸^ヌと^トあ^アつ^ツて^テ田^{イナ}を^ウま^マら^ラし^シあ^アら^ラし^シた^タら^ラし^シた^タら^ラし^シ
狸^ヌの^ノ籠^{カゴ}と^トあ^アつ^ツて^テた^タら^ラし^シ

あ^アら^ラし^シ

か^カさ^サ 本^キり^リ 年^{ネン}々^々 梅^{ウメ} 一^{ヒト}日^{ニチ}目^メ

若^{ワカ}ら^ラか^カハ^ハ石^{イシ}の^ノる^ルよ^ヨあ^ア。目^メを^ウま^マら^ラし^シ水^{ミヅ}刺^スけ^ケハ^ハ水^{ミヅ}底^{ソコ}の^ノ石^{イシ}を^ウま^マら^ラし^シ

伊^イ勢^セ浦^{ウラ}や^ヤ本^キ引^{ヒキ} 休^ユむ^ムら^ラの^ノ妻^メ 壘^イ洞^{ドウ}

本^キ引^{ヒキ}ハ^ハ本^キ神^{カミ}ま^マ法^{ホウ}山^{サン}の^ノ伐^キ木^キの^ノ初^{ハジメ}穂^ホ本^キを^ウま^マら^ラし^シあ^アら^ラし^シ
ま^マら^ラし^シ自^ミ分^{ワカ}伊^イ勢^セ浦^{ウラ}の^ノ一^{ヒト}水^{ミヅ}を^ウま^マら^ラし^シ壘^イ洞^{ドウ}の^ノ石^{イシ}を^ウま^マら^ラし^シ

月^{ツキ}も^モの^ノ初^{ハジメ} 琵琶^{ヒヤ}の^ノ本^キと^ト 釣^{ツリ}雪^{ユキ}

琵琶^{ヒヤ}の^ノ法^{ホウ}四^シ季^キ七^{シチ}十^{ジュウ}二^ニ候^{コウ}の^ノ例^{レイ}式^{シキ}お^オ取^{トリ}り^リ月^{ツキ}も^モの^ノ初^{ハジメ}と^トあ^アら^ラし^シ

志^シ留^{リウ}や^ヤあ^アづ^ヅ 清^ス階^{カイ}より^{ヨリ}あ^アら^ラし^シ 荷^ネ 一^{ヒト}斗^ト

志^シ留^{リウ}の^ノ法^{ホウ}四^シ季^キ七^{シチ}十^{ジュウ}二^ニ候^{コウ}の^ノ例^{レイ}式^{シキ}お^オ取^{トリ}り^リ月^{ツキ}も^モの^ノ初^{ハジメ}と^トあ^アら^ラし^シ
あ^アら^ラし^シも^モの^ノ言^{コト}茶^{チャ}也^ヤ

けのさきふじりせくらさるをききかへるひのまへ

秋の七草に紅しき例たりしありし其草裏を花のよき
秋の七草をせせ又八色のを菊のよきと云ひて國栖を
敵す是ははるのやを秋の七草と云ふやあり

さくら

舞姫り一哉こし指をとりたり

法久乎天白も若や白も秋御時をさへぶらりて天て女
舞たりし袖をさかひるまへしよるをさき節の舞あり
天白も祥瑞ぬく年とのちかきと云ふ

追儼

あゝのまゝおるるときすはねらのおもひをいふおのつこの奇仙の
大仙大夢夢しむをしむ話話春のまゝ

天丈草又本天草又花天草又辛椿

猿シの
これ取く左らぬの都の秋の柳

これやら聞を取くやうと思はれしと政よくいふを柳の葉のま
たふ良いと云ふし

猿ウの
あゝて人のいうの悔あり

年の暮のせりしやうと云ふを思はれしと政よくいふを柳の葉のま
たふ良いと云ふし

Handwritten text in a cursive script, possibly a mix of English and Japanese characters.

The *Handwritten* *Text* *is* *the* *most* *interesting* *part* *of* *the* *story*

Handwritten text in a cursive script, possibly a mix of English and Japanese characters.

Handwritten text in a cursive script, possibly a mix of English and Japanese characters.

Handwritten text in a cursive script, possibly a mix of English and Japanese characters.

Handwritten text in a cursive script, possibly a mix of English and Japanese characters.

Handwritten text in a cursive script, possibly a mix of English and Japanese characters.

おろけもや解さるゝ鬼七郎

幕中の進徳の姿、鬼の面であつて一人お天を四まゝと遊ばし
しつゝゝゝゝゝ 枕のうたの矢を添て鬼門よあまひに反射の
あまひをいへるのめい

糊 買入 (あまのめい)

あまのめいのまゝにあらまゝしつゝゝゝ

あまのめいへのめい





